

京都、大阪短行记

苗国

中国有句俗语——“百闻不如一见”。8.11-8.16 是自己人生中第一次“出洋”，而这第一次“洋经历”能幸运地邂逅具有深厚文化底蕴的“东洋国”，兴奋与愉悦的同时又感获益良多。西方文化人类学学者喜欢用“文化震撼”（culture shock）来形容他者来到异域文化所感受的冲击，作为一个从小看迷恋日本动漫的他者，尽管对日语相当茫然，但源自中文与英文世界灌输的种种想象片段得以在京都、大阪这短短几日绘成一副真面容，视觉印象完整后，心底的体会地却是一味“亲密型疏离”，既非陌生又激烈的直接刺激，也不能算“如家般”的自在熟悉，这种复杂之体验也许是中日两国间复杂历史渊源交融交错之故吧。

听在日本的中国留学生说，日本国民对“味道”有着痴迷的追求，这种印象除了随着大家满街尝试“货真价实”的日式料理外，自己也好奇地翻看清风会馆里的电视频道，电台里美食节目多之咂舌，亲眼见，才深知同学此言不虚。感官之体验是日本精致社会的核心所在，不管是与味蕾相关美食饕餮，还是鉴赏佳食美饮环境氛围的极致追求，连京都街头的花花草草，各个景区能够梳妆打扮的小品装饰，可以旧但绝对不破且一尘不染的出租车，风格多元却又独守传统的日式庭院……总而言之，衣食住行，任何需要“包装”的物还是人，乃至精神，都渗透着一种浓浓的日式审美情趣，特别是对承载思想的语言来说，尽管自己于日文相当无知，但是，隐约觉得这种细腻的语言在捕捉人类复杂情感体验，特别是忧伤离别、虐心无助、悔恨无期、错过又淡然之体验，一定有着先天的优势，这也在一定程度上塑造了一个国家国民的整体性格，就个人之观感，大多数日本国民不善于“打交道”、也不喜“凑热闹”，人人之间的依赖似乎是靠一套复杂的“客套”体系来维持。礼貌之“和风”背后是冷淡人情，甚至于爷爷辈对孙辈的期待都淡如水，这在当下中国实在是不可想象。而这却不意味着国民内心世界很空洞，恰恰相反，个人以为，这种国民性是大家内心世界复杂而不好与他人“相溶”所致，这个世界的教育太过发达，每个国民都在忙碌的工作、学习、充电，阅读习惯是造就高民族素质的源头，关于这一点，西洋的美利坚也无法与之相比，那里无知到发指的白丁与无所不知的社会精英呈现出鲜明的社会分层，也许只有德意志也有同样的喜欢阅读的民族癖好。

总之，这个国家注重质量品质、保护知识与传统文化，这是一个看得见的巨大优点，但在某种程度上，对于细节的过分执著似乎让整体大局意识显得局促，不管是阅读论文还是博物馆参观都多少有这种感受，日本的年轻人似乎也不太感兴趣所谓“全球视角”、“国际前沿”，这与当下中国青年一代的“野心勃勃”与“宏大世界观”形成鲜明之对比，自然，这无关是非对错，只是在当下的中国教育环境与社会思潮下，英语大肆入侵、西洋文化充斥的中国大地，真的亟需一些清凉与精致的审美情趣，而非制于粗鄙的西方消费主义文化的无情洗脑，在世界各地，眼见同胞们如同蝗虫般血洗各种化妆品店、奢侈品店、***店，总有种莫名的“cheerful robot”悲哀，物质享受固然无可厚非生活品质亦很重要，但是精致精神之追求，东洋国实地见识了不同的“味道”。这次与紧邻的近距离亲密接触，行程很紧凑，细致中体贴入微的关怀让人难忘，感谢京都大学的老师与同学们的热情款待。尽管距此次赴日之行已过数周，可诸多所见、所闻与所思却总历历在目，出行像一面镜子，看别人更是照自己，此行也因此受益良多，只可惜时间甚短，“走马观花”也非文化人类学的研究理念，期待未来能有机会更多的了解与交流，再次为愉悦和体贴的日本之行表示深深的谢意。

京阪小旅行記

苗国

中国には「百聞は一見に如かず」という言葉がある。8月11日から16日は、自分の人生の初めての「洋行」であり、この初めての「海外経験」では幸運なことに深遠な文化を具える「東洋国」に邂逅し、多くの興奮と楽しみを同時に得ることも多かった。西洋の文化人類学者は異なる文化圏で受ける衝撃を「カルチャーショック」と表現することを好むが、日本のアニメに熱中する者を小馬鹿にしていた者として、たとえ日本語がほとんど理解できなくとも、中国語と英語の世界から頭に入りこんでいた様々なイメージの断片は京都や大阪でのごく短い数日においてひとつの像を結ばせ視角的印象が整った後に、心の底で理解したのは一種の「親密な疎遠さ」であり、それは見知らぬ激しい直接的刺激でもなければ、「我が家のように」熟知していることとでもなかった。このような複雑な体験は中日両国の複雑な歴史的淵源や融合、交錯ゆえのことかもしれない。

在日中国人留学生によれば、日本国民は「味」に対する深い追及心を持っており、このようなイメージは、連れだって「正真正銘」の日本料理を食べた時以外にも、ひとりで興味深く清風会館（宿舎）のテレビ番組を見たときに、テレビの中のグルメ番組の多くは垂涎に値するのを目の当たりにし、留学生の言ったことが嘘ではないと思い知った。

知覚による体験は、日本の精緻な社会の中核である。それは、単に味蕾と美食が結びついているだけではなく、すばらしい料理と飲み物を鑑賞するための環境や雰囲気へのあくなき追及でもある。京都の街角の草花や景勝地を彩るのに十分な装飾、ちりひとつないタクシー、スタイルは多様でありながら伝統を守る日本庭園にまでもおよんでいる。

つまり、衣食住など、あらゆる「包装」が必要とされるものや人、あるいはその精神に一種の色濃い日本式の美的趣味が浸透し、とりわけその思想を伝える言語にとっては、自分が日本語にほとんど無知であっても、このような細々とした言葉は人の複雑な感情体験を捉えているようにぼんやりと思え、特に憂傷離別（離別の憂え悲しみ）、虐心無助（救いのない心の痛み）、悔恨無期（終わりのない悔い）、機会を逸しても淡々とする体験など、日本語はかならず天生の優位を有しており、これもある程度は国家国民全体の性格を形成するのに影響を与えたと思うのである。

個人の感想としては、大多数の日本国民は「つきあい（打交道）」が不得手で「駆けつけて盛り上がる（湊熱鬧）」のも好まず、人々間の関係は複雑な「他人行儀」によって維持されているかのようなのである。礼儀の「和風」の背景は冷淡な人情であり、祖父さえ孫に対して水のごとき淡き関係を期待しており、これは現在の中国では想像できないことである。

しかし、これは国民の内面世界が空洞であることを意味しているのではなく、まさにその反対で、個人はこのような国民性がすべての人々の内面世界の複雑さであると考え、他人と「相互に受入合うこと（相溶）」をよしとしない。この世界の教育は発達しすぎて、どの国民も多忙な仕事や勉強、自分磨きに追われているが、読書の習慣は民族の素質を高める源であり、この一点に関して、アメリカもまた比べることはできず、そこに無知の民衆と知らないものは何もないというエリートという明らかな社会分化が出現している。西洋ではドイツだけが同様の読書好きという民族性を有しているかもしれない。

つまり、この国家は品質を重視し、知識と伝統文化を保護するが、これは大きな長所と

見てとれる。しかし、その一方で細部に対する過度な執着は全体を窮屈にさせているように見え、論文を読むことであれ博物館の見学であれ、同様の印象を受けた。日本の若者はあたかも「グローバル視点」や「国際的最前線」に興味を持っていないかのようであり、これは現在の中国青年たちの「野心満々（野心勃勃）」や「マクロな世界観（宏大世界観）」と鮮明な対称を成している。しかし、これは正しいか正しくないかの問題ではなく、現在の中国における教育環境と社会思潮の下で、英語が我が物顔で入り込み、西洋文化が中国の大地に氾濫する中で、しばしば一抹の清涼で精緻な美的趣味が要され、粗野な西洋の消費主義文化の冷酷な洗脳、世界各地で同胞たちがイナゴの大量殺りくの如く各種の化粧品店や奢侈品店へ群がる様は、Cheerful robot の悲哀そのものである。物質の享受は確か非難すべきほどではないが、生活品質も重要である。しかし、その精緻な精神の追及については、東洋国で実際に異なる「味」の見聞を広めた。

今回は近い距離で親密に接し旅程も緊密で微に入り細に入りの配慮は忘れ難い。京都大学の教員院生のみなさんの親切な歓待に感謝する。今回の訪日からすでに幾週間が過ぎたが、いろいろと見聞きでき、いまでもありありと目に浮かぶ。旅に出ることは鏡を見るようなもので、他者を見ることは自己を見ることである。このため今回の訪問では得ることが多かったが、惜しむらくは時間が短かったことである。「馬で駆けて花を見る（走馬看花）」は文化人類学の研究理念ではない。将来においてさらなる交流と相互理解の機会が訪れることを期待する。重ねて愉快で親身であった日本のみなさんに深く感謝の意を表する。

（翻訳 中山大将）